

山辺里織と明治期勸業博覧会：博覧会が山辺里織の発展に果たした役割

著者名(日)	赤羽 光
雑誌名	共立女子短期大学生活科学科紀要
巻	55
ページ	59-76
発行年	2012-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002573/



山辺里織と明治期勸業博覧会

— 博覧会が山辺里織の発展に果たした役割 —

赤羽 光

Saberiori and national industrial exhibitions during the Meiji era
— The role played by the national industrial exhibitions in the development of Saberiori —

Hikaru AKABA

This study considers the role of national industrial exhibitions in the development of “Saberiori” (Saber-textile).

Saberiori is a silk textile which had been produced from the final years of Kansei era (1789-1800) to later of Showa era (1978) in Saber village, Echigo Province (the present Saber village, Murakami city, - Niigata Prefecture). The Oda house had been woven it for generations, and it became major industry of the region.

In those days the evaluation on national industrial exhibitions had great influence on sales of production. Saberiori was highly praised as high-quality products in various exhibitions. Those national industrial exhibitions played a significant role in the development of Saberiori.

National industrial exhibitions were the place to certify the quality of Saberiori and they promoted to improve the technique and to develop textile industry.

キーワード：Saberiori (Saber-textile) 山辺里織、

National industrial exhibitions 内国勸業博覧会、significant role 重要な機能

I. はじめに

山辺里織とは、かつての越後国・現新潟県村上市山辺里村で、山辺里村の旧家、小田家により代々織られてきた織物の総称である。江戸時代寛政末年に、山辺里村庄屋四代小田伝衛門利吉が、息子たちに仙台などで機織の技術を学ばせ、手織の絹織物生産に着手したのがその始まりである。

文化・文政年間には仙台平の技術を模倣し、袴地を織りあげていたが天保年間より山辺里織に緯糸が2本入るという独自性が出現し（共立女子短期大学生活科学科紀要第54号¹⁾ 参照）、以

後、その独自性を保持しながら発展。明治時代に入ると販路も拡大し、売上・職工の数も増加。袴地を主要製品として発展させた山辺里織であるが、明治30年代には洋服裏地（名称は「サベリ」）の生産を開始。サベリは高級裏地として洋装化の進展とともに発展し、工場の閉鎖（昭和53年）まで長く製造された。

この、山辺里織の発展には博覧会が深く寄与していた。しかしながら、明治期勸業博覧会における山辺里織の研究はこれまでになされてきていない。そのため、本稿では山辺里織²⁾ の評価の変遷を辿るとともに、同評価が山辺里織の品質証明に果たした役割を論じる。

1. 明治期の博覧会

明治期の博覧会に関する先行研究は豊富で、史学的視点から論じたものや、美術史や経済的な観点から、建築に焦点を当てるものなどテーマ研究も多岐に渡る。

しかし、それらは博覧会主催の政治的・経済的背景や出品製品の全体を論じたものがほとんどであり、製品を出品する側からの視点で論じたものは極めて少ない。そこで、本研究では山辺里織が博覧会をどのようにとらえていたのか、実態を明らかにすることを目的としているため、山辺里織という一出品物の視点から論じていく。

江戸時代、幕末に開港を迫られた日本では、外国との取引において生糸や茶を主要輸出品としていた。貿易を行っていた初期の頃は輸出が輸入より多かったのだが、間もなく輸入が上回った。

開港を一つの転機として、日本は殖産興業に力を入れることとなった。その目的を果たすべく、明治時代には万国博覧会や内国勸業博覧会や共進会、陳列会などを日本各地で行い、積極的に商品を競い合うようになった。

博覧会の種類には万国博覧会と内国勸業博覧会がある。万国博覧会の起源は、1797年にフランスで行われた工業製品展示会である。後に史上初めてとなる万国博覧会は1851年のロンドンを筆頭に、20世紀初めまでにロンドンで2回、パリで6回、シカゴで2回、ウィーン、フィラデルフィア、セントルイス、ニューヨークで1回ずつ開催された。

日本政府が公式に参加した初の万国博覧会は明治6（1873）年のウィーン万国博覧会である。明治4（1871）年2月にオーストリアのヘンリー・ガリッチが同博覧会への参加を日本に要請。それを受け、日本では各地域の工業品や農産物の全国統計を行った。先行研究によると、明治5（1872）年正月に、太政官より発せられた布告の中で、博覧会は、「其国の天産物、人造品を出品し、学術工芸の進歩、政治経済の要旨を表現し、人類の交流により、互に利益を得ると

の原則によって利用厚生之道を十分に尽すもの……（略）」とされている。また、日本は、「まだ器械類の発明されたものはないが、工芸では精妙にすぐれたものが多い。ことに生糸、蚕卵紙、茶、紙、陶器、漆器等の製造についてはすでに海外からも賞讃されている。これをさらに精良なものに進めてゆけば、やがて東洋第一の物産となり、世界各国ともこれを購入して日用の必需品とするようになれば、国の榮誉をあげ繁栄を招くのはいうまでもないことである。」と、日本の国益を図ることが強調された内容となっている。

以上の布告を受け、各地の特産品を調べるべく、明治政府が明治4（1871）年から6（1873）年にかけて工業品や農産物を対象とした全国統計が『府県物産志』である。全国統計³⁾を行った目的は、先に述べたようにウィーン万国博覧会への展示と将来建設される予定の博物館の展示資料の収集である。当時、博物館には輸出に向けての商品を展示・公開し参考にするものであったため、展示よりも輸出へ焦点が当てられていた。出品の指示を受けた各地方からは一品を二点ずつ集め、その一点をウィーン万国博覧会へ出品すること、他の一点は今後日本でを行う博覧会へ出品するものであった。『府県物産志』に記載されている染織品は、京都西陣織物をはじめとする各地の主要織物が並んでいる。宮城県は仙台平、栃木で生産されていた小倉織など、現代にまで通じる生産物である。新潟県も織物産地として当時はよく知られていたため、古志郡栃尾の縞紬など、名産品が記されている。他には五泉の練精好や、白絹などが記載。農産物では茶、動物では鮭、他に漆器等、新潟の代表的な産物として挙げられている。

角山（1997, p50）の研究によると、『府県物産志』に記載されている染織品は品名、大きさや材料の明細、生産地や一品あたりの代価、1年あたりの製出量が記録されているという。

この統計の中で特筆すべき点は、山辺里織の記載があることである（図1）。山辺里織は明

傳心集

中華書局影印

次に、内国勸業博覧会について述べる。内国

— 61 —

して共進会は物産により開設の適期や適地の選定が可能であること、出品種類の制限により出品者、審査員、観覧人を専業者で所有でき、このため専業者会議の開催が可能、小規模なので地方自治体による開催も容易と、博覧会のマイナス面を克服したものだ」と指摘している。

2. 使用資料についての紹介

本論を述べるにあたり、使用する資料は表1の通りである。表は各資料の特徴と内容を記したものである。

本研究の主軸となる資料は3点であり、他の資料は主軸資料の補足として使用する。山辺里織機業の全体については『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』(図2)、『山辺里絹織物業沿革』(図3)を参考に歴史的な動向を読み取り、製織技術や博覧会への出品内容については『博覧会出陳記』(図4)を参考に論じていく。

Ⅱ. 内国勲業博覧会に出品された山辺里織

本項より、博覧会へ出品した山辺里織について論じていく。また、山辺里織の歴史と博覧会の変遷を考慮し、第一回から第二回内国勲業博覧会までを初期、第三回から第四回内国勲業博覧会までを中期、第五回内国勲業博覧会を最盛期と時代区分をする。また、山辺里織が博覧会や各種共進会へ出品した記録は表2に示す。

1. 織物の出品数と技術の変遷—初期

山辺里織機業が博覧会に最初に出品した記録は、『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』と『山辺里絹織物業沿革』に書かれている。同書によると明治11(1878)年に京都博覧会に出品し、賞状をもらう、との記述が残されているが、『博覧会出陳記』に京都博覧会に出品した裂は残っていないため、製織技術を検討・考察するには困難を極める。『山辺里絹織物業沿革』の中には、翌年明治12(1879)年から14(1881)年まで山辺里織機業の商売は好調となった、と記録があり、第一回内国勲業博覧会賞状受領の

影響であろうかと推察できる。同書には明治14(1881)年に第二回内国勲業博覧会⁴⁾に出品し、褒状を得る、との記録が残されており、『博覧会出陳記』にも記録とともに裂が貼られている。そのため、以下より明治14年第二回内国勲業博覧会以降興った博覧会と山辺里織について述べる。

『博覧会出陳記』によると、山辺里織の第二回内国勲業博覧会出品総数は16点、うち、冬袴地本練平が4点(11円40銭から12円)、夏袴地精好平が4点(売価8円6銭から9円22銭)、半練平暑寒袴地が4点(売価5円62銭から6円50銭)、精好平夏袴地4点(4円60銭から5円20銭)、精好平子供夏袴地が4点(3円)。同資料によると、受賞したのは半練平袴地で、5等賞であった。

種類別に織の特徴を見ると、ほとんどの袴地において緯糸を2本用いていないが、夏袴地精好平は一部の袴地において2本の緯糸を使用している。出品された袴地の各種は、製織する際の織密度も均一であり、縞の模様も地の部分と同じだけの割合の糸を使用している。(図5、6)博覧会での賞牌授与の影響であろうか、第二回内国勲業博覧会後の明治16(1883)年、山辺里織機業は白木屋との取引を開始した。

次に山辺里織が出品されたのは明治17(1884)年、18年に岩手県勲業博覧会と鹿児島県勲業博覧会、東京上野繭糸織物漆器五品共進会である。岩手県勲業博覧会では3等賞を、五品共進会では5等賞銀杯一箇を受けた。山辺里織機業が地方で行う共進会に出品するのはこれが初めてであった。明治10年代は経済の変動が激しく、特に明治16、17年は国内中が不況に苦しんだ。山辺里織機業も例外ではなく、注文がない時期であった。それに関わらず、共進会へ出品。得た賞牌は大きなものとは言えないが、機業を継続するための活力を高めることができたのではないだろうか。

山辺里織と明治期勸業博覧会

表1 使用資料一覧

資料名	所蔵先	資料形態	著者	内容
『明治拾七年 鹿児島勸業博覧会出品解説書』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したものと推測	明治16年前後に編集。明治17年に行われた鹿児島勸業博覧会への出品のために記したもの。製品の出品数や当時の工場面積、生産高、職工数などが記録されている。他の資料と比較し、上記沿革の整合性を図る上で貴重な文書である。提出した書類の下書きあるいは写しと推測できる。
『第四回内国勸業博覧会出品願』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したものと推測	第四回内国勸業博覧会への出品のために新潟県知事宛に記したもの。当時の生産高、沿革などが記されている。これまでの博覧会提出のための書類には珍しく、審査要点が記しており、当時の山辺里織の特徴とセールスポイントが書かれているため、技術的な動向を知る上で貴重な文書である。提出した書類の下書きあるいは写しと推測できる。明治27年前後の記述。
『第五回 内国勸業博覧会出品解説書』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したものと推測	第五回内国勸業博覧会への出品のために記したもの。明治34年前後の記述。小田長四郎機工場の当時の生産高や職工定則、使用機、沿革など、記録は多岐に渡っている。提出した書類の下書きあるいは写しと推測できる。
『明治四拾年 韓国京城博覧会第三部解説書』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したものと推測	他の博覧会出品資料と同じく、当時の生産高や職工定則、使用機、沿革などが記されている。提出した書類の下書きあるいは写しと推測できる。
『京城博覧会出品申込書』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したものと推測	明治39年前後の記録。申込のための製造品の種類と通し番号、工場の所在地と申込のための最小限の書類であり、『明治四拾年韓国京城博覧会第三部解説書』の出品品目との整合性を図る上で有意な資料である。提出した書類の下書きあるいは写しと推測。
『明治四拾年度 三代小田長四郎日誌』	村上 郷土資料館	手書きの文書	三代小田長四郎 が記したもの	明治40年1月1日から同年大晦日まで記してある。日誌に入る前に明治39年時点での顧客情報、明治40年の1年間の予定が記されている。以降、日々の日誌が記されているが、記述のない日もある。1月5日付の日誌には三越呉服店からの拝電の内容、米田セントルイス万国博覧会への出品結果、銀賞を受けた、との記述がある。博覧会出品解説書などの公の文書とは違い、三代小田長四郎の私的な記述であるため、非常に生々しい内容となっている。また、文字の癖がかなりあるため、解読が困難な文書の一つである。
『博覧会出陳記』	村上 郷土資料館	台帳		明治11年第一回内国勸業博覧会から昭和11年11月30日の貿易品求評会までの裂が添付されている資料。出品物の番号は「番附」と記してあるが、本来の番付の意味ではなく、通し番号として使用されている。賞を獲得した際にはその記録があり、裂にも製造者名が記されている。さらには明治時代の皇太子殿下への献上袴地裂も添付されており、当時の技術の最高値をこの資料から見ることができ。本研究の製織技術の動向を知る上で各時代の裂が添付してある資料はこれまでの調査及び先行研究を見る限り皆無。山辺里織機業の一時代ではなく全体を網羅し、博覧会への出品という記録に特化している点で非常に貴重な資料である。
『山辺里織元 小田長四郎機工場沿革』	新潟県立 文書館	手書きの文書	著者不詳	寛政末年より昭和3年までの記録の資料。昭和3年前後に編集したものと推測。山辺里織機業の分家の側からの記述。代々小田長四郎を中心に機業の沿革をまとめたものである。内容は、初代小田長四郎が山辺里織機業を築き上げた経緯。以降、販路、製造機物の沿革と不況の時代の対応策、博覧会への出品や褒状の内容などである。五代小田長四郎が指揮をとった途中の時代で記述は終わっている。更にこの文書には、二代小田長四郎の二男、小田助作がサベリ製造を行う経緯も記されている。本研究全体の主軸となる貴重な資料である。
『山辺里絹織物業沿革』	小田家(本家)	手書きの文書	著者不詳	寛政末年から昭和39年までの記録の資料。昭和40年頃編集したものと推測。山辺里織機業の本家の側からの記述。織物業成立の経緯と初期の技術伝播の記載がある。その内容は、『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』とやや同じ内容も含まれている。構成は沿革ノ一、沿革ノ二の二部構成。沿革ノ一では、寛政末年から昭和18年までの記録があり、『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』とは別の記録であるため、本家の全体的な動向がわかる唯一の資料である。沿革ノ二では、『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』と歴史的な動向、記述はほぼ同じ内容であるが、『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』では分家・小田長四郎の具体的な山辺里織機業への尽力した記述があるのに対し、『山辺里絹織物業沿革』は、あくまで本家も機業の経営に関わっていたことが記されている。このことから、小田家の一家総動員で機業を成り立たせていた様が見受けられる。上記資料と同じく、本研究全体の主軸となる貴重な資料である。

表2 山辺里織博覧会出品年表

元号	年	月	博覧会名	出品品	受賞品(銘柄のわかるもの)	受賞	備考
明治	11年		京都博覧会	袴地各種		褒状	
	14年		第二回内国勸業博覧会	袴地各種	半練平袴地 夏袴地	賞状	
	17年	2月	岩手県勸業博覧会	袴地各種		3等賞牌	
	17年		鹿児島県勸業博覧会	精好平夏袴地 半練平暑寒袴地 本練平冬袴地			
	18年	6月	東京上野繭糸織物漆器五品共進会	袴地各種		5等賞 銀杯一箇	
	23年	7月	第三回内国勸業博覧会	袴地各種		褒状	
	27年	6月	富士市設博覧会	袴地各種		銅牌	
	(28年)	7月	第四回内国勸業博覧会	袴地各種		有効3等銅牌	三代長四郎審査補助。 終了後銅牌を受ける。
	29年	7月	第一回五二回	袴地各種		有効銀牌	
	30年		創設二十五年記念博覧会	袴地各種		銀牌	
	32年	5月	一府九県聯合共進会	袴地各種		二等褒賞 銀牌一個	三代長四郎織物審査委員
	33年	4月	大日本織物協会展覧会	袴地各種		銀牌	
		8月	関西府県聯合共進会	袴地各種		二等賞 銀杯一個	
		10月	新潟市漆器染織聯合共進会	袴地各種		一等金牌	
	35年	10月	大日本織物協会第四回展覧会	袴地各種		二等賞銀牌	
	36年	4月	第五回内国勸業博覧会	袴地各種		二等賞牌	第五回内国勸業博覧会審査委員。終了 後銀杯一個を受ける。
	39年	11月	東京府外九県聯合共進会	袴地各種		一等賞金牌	農商務大臣より功労賞銀杯
	40年	3月	東京上野勸業博覧会	袴地各種	本練平袴地	一等賞	
		9月	韓国京城博覧会	袴地各種		一等金牌	
		10月	新潟市漆器染織聯合共進会	袴地各種		一等金牌	
	41年	11月	一府十県聯合共進会	袴地各種		一等賞金牌	皇室御買上。織物部審査委員。
			日英博覧会	洋服裏地	洋服裏地		
		9月	一府十四県聯合共進会	袴地各種	袴地	一等賞金牌	織物部審査委員
大正	3年	7月	東京大正博覧会	袴地各種	聖明平袴地	金牌	
	4年	11月	大典記念京都博覧会	袴地各種	聖明平袴地	金牌	
	6年	5月	京都博覧会	袴地各種	経紹平袴地	金牌	
		5月	長岡開府三百年記念新潟県郡市聯合 物産共進会	袴地各種	経紹平	一等賞金牌	
		7月	第十八回全国特産物博覧会	袴地各種		名誉金賞牌	
	14年	4月	日本絹業博覧会	袴地各種	綾平袴地	金牌	
		11月	中部六県聯合織物共進会	袴地各種	聖明平袴地	一等賞金牌	同会顧問名古屋税務監督局長より品質 優秀であったため、表彰状を受ける。
	15年	9月	第二回中部六県聯合織物共進会	袴地各種	綾平袴地	一等賞金牌	
昭和	2年	9月	第三回中部六県聯合織物共進会	袴地各種	聖明平袴	一等賞金牌	
		11月	国産振興染織工業博覧会	洋服袖裏地	洋服袖裏地	優良国産品	
	3年	5月	第四回中部六県聯合織物共進会	袴地各種	綾平袴地	優等賞	
		5月	大禮記念国産振興東京博覧会	袴地各種	洋服袖裏地	優良国産賞牌	
		5月	東北産業博覧会	袴地各種	経紹平袴地	金牌	

2. 織物の出品数と技術の変遷—中期

明治23（1890）年、第三回内国勸業博覧会が開催された。『博覧会出陳記』によると、山辺里織の出品総数は26点。冬袴地本練平が5点、半練平暑寒袴地が5点、精好平夏袴地が4点、保登織が4点、精細夏洋織地が4点、洋服裏地が4点。『博覧会出陳記』には第三回内国勸業博覧会の出品した裂は添付されてなく、製織技術を検討することは困難である。だが、他の資料で検討を行うと、既に明治17年の共進会より緯糸が2本入ったものが主力製品として出品。第三回内国勸業博覧会の出品製品も独自の技術製品が主力のものであったと推測できる。

第三回内国勸業博覧会と時を同じくして、山辺里織機業は販路を拡張することができた。そのため、製品品質の安定保持と、新製品を作りだすことに関してはこの時代から飛躍的に変化する。加えて、意匠の種類も各段に増えた（図7参考資料）。それまでは縞の模様と地の割合は均一であったが、縞の模様と縦糸の割合を増やし、袴を着用した際、模様が美しく出るような配色を施している。

明治28（1895）年に第四回内国勸業博覧会が開催。この博覧会からは出品物を精選することとした。ある程度の基準に達していない出品物には出品拒否を行い、ハードルを高めたのである。第四回内国博覧会に出品した山辺里織は、有効3等賞を受賞した。『博覧会出陳記』によると出品した総数は3種50具。もっとも多い種は本練平袴地で30反、次いで半練平暑寒袴地18反、精好袴地2反。織の検討を行うと、これまでと同様、独自の製織技術の袴地と、緯糸が1本のみの袴地を出品していたことがわかった。

3. 織物の出品数と技術の変遷—最盛期

明治36（1903）年に開かれた第五回内国勸業博覧会に山辺里織は出品され、2等賞牌を授与。『博覧会出陳記』を基に資料を検討すると、出品数は本練平袴地が20点（売価13円10銭から16円80銭）、婦人袴2点（売価13円10銭と13円20

銭）、半練平が10点（売価11円から16円10銭）、半練中柄が8点（売価5円20銭から6円90銭）、総計40反出品と、これまでに最も多く出品をした。売却した品も多く、本練平は17反、反練中柄は1反、総数18反232円50銭を売り上げた。明治35年の山辺里織機業の1年間総売上は92,174円86銭であった。博覧会での売上額に関しては1年間の総売上から見ると多くないが、博覧会へ出品し、売却したという点が注目できる。

製品の製織技術も第二回内国勸業博覧会時より各段に上がり、技術の高い仕上がりになっている（図8）。

4. 織物の出品数と技術の変遷—総括

以上が山辺里織の出品数と技術の変遷を各期でまとめたものである。山辺里織が博覧会という大きなイベントに出品する際には、必ず独自性の製織技術を主力製品としていた。しかし、全ての製品に独自性が適用されていたわけではない。この事実を考察すると、山辺里織の独自技術は一部の職工にしか知られていなかったのではないだろうか。山辺里織の技術は、緯糸を1段の中に2本入れ込むものである。一見単純なように聞こえるが、考える全ての方法を試みてもその復元は困難である。小田テル子氏によると、機を織る際に綜行の一番端、みみの部分を一旦くくらせてからもう1段入れ込む手法であるのだが、細い絹糸で上記の技を行うには機そのものを操作する方法か、手作業で行う方法かの2種類に分けられ、熟練した腕前が必要になる。後の時代に出てくる変わり模様の織物もこの方法で製織することができ、独自性をふまえつつも応用の効く技術は高度な技から成り立っている。そのため、上記技術は知的財産と同じ扱いとして、一部の職工にしか教えられてなかったのではないかと推察することができる。

次項より、独自の製織技術の特徴を検討し、考察を行うこととする。

Ⅲ. 製織技術の特徴と審査に関する考察

1. 製織技術の特徴

山辺里織の織元・小田テル子氏によると⁵⁾、緯糸を2本入れることで丈夫になることに加えて、皺になりにくいという。『第五回内国勲業博覧会解説書』（村上郷土資料館蔵）と『第四回内国勲業博覧会出品願』（村上郷土資料館蔵）および『明治拾七年鹿児島勲業博覧会』（村上郷土資料館蔵）を参考に検討を行うと、山辺里織の製織技術は、明治17年、28年の技術ともに染色材料や糸の使用方法などに変化は見られない。内容も各出品解説書によって様々であるが、明治28年の第四回内国勲業博覧会、明治35年第五回内国勲業博覧会の資料では山辺里織の特徴として以下の記述がある。

審査要点

織物袴地組織上ニ付テ需要者ノ愛玩スルモノニアリーハ表面ノ美ニ取締條等ノ意匠ニシテハ染織ノ耐抗ト組織法ニヨリテ實用ノ持久ニアリ普通ノ織物ハ概シテ縦糸量ニ比スルニ横糸ノ多量ヲ用ユルヲ常トス縦糸細ク横糸太ク組織スル時ハ一見以テ織物ノ畝立宜シク堅固ニ見ユルトモ實用ニ於テ持久ニ耐サルナリ…（中略）…袴地ノ如キハ縦糸ノ横糸ニ増スルコト一割以上二割ノ多量ヲ以テス之レ外見上ニ付他裏販ヲ家ルマタ数年然レ共屈折スルナク一種特産トシテ改メズ

（『第四回内国勲業博覧会出品願』より）

山辺里織の審査要点として、第一に意匠の美しさを挙げ、第二に組織の堅牢さを挙げている。同資料には続いて販路を年々拡張し、「實用持久ノ点ニ於テ特ニ審査ヲ請フ」と、審査で特に評価してほしい「持久」を記している。当時、経糸の重量の1割から2割多く緯糸を入れ込むことによって耐久のある織物を作り出していたことが伺える内容である。

明治28年のこの文書と同様、明治35年の文書

には以下のように記されている。

織方ハ主トシテ實用耐久ヲ旨トシ縞條配色ハ高尚優美シ専ラトシ組織ス而メ實用耐久ノ要素ハ縦糸ノ量横糸ノ量ヲ比シ一割以上二割多キ割合ニテ打込ヲ充分ニシ堅牢ニ組織シアルヲ以テ擦シ功レ皺付セサルコト大ニ客業者ヲ賞賛スル所ナリ而メ縦糸ノ量横糸ノ量ヨリ多クシテ堅牢ニ製シ袴地ノ風合ヲ保タシタルハ機業家ノ大工ニ困難トスル所ナレ□□年ノ研究ヲ重子テ今ヤ自家特得長□トシテ需要大ニ増加スルニ至レリ

（『第五回内国勲業博覧会解説書』より）

明治35年時点でも、「實用耐久」と「意匠の良さ」「組織は経糸よりも緯糸を多く打ちこんでいる」ことを示している。以上が当時の山辺里織の特徴である。明治17年時点と比較して、すでに28年時点で技術面での躍進が見られ、品質の向上を博覧会審査委員にアピールしていたことが伺える。

これらの資料検討を行うと、小田テル子氏の述べた丈夫な織物である、ということが立証される。袴には耐久が不可欠であるため、通常時に裂けたりしないよう製織する際均一な力で打ち込みをする必要がある。さらに、この緯糸の割合を調整することで重量を増すことができ、膝ぬけを防ぐことができる。この独自技術によって、山辺里織袴地は畝ができるほど緻密に織りあげられ袴の用途を最大限に引き出されていたのであろう。

2. 審査評語から見る他の織物との比較

各博覧会に出品された山辺里織は、当初の審査では高い評価とは言えないが、時代を経るごとに高い評価、それに準じた賞を獲得するようになった。

国立国会図書館蔵『第二回明治十四年内国勲業博覧会審査評語』（内国勲業博覧会事務局編）によると、山辺里織の受賞作品は2種、「夏袴

地製品」と「袴地製品」であった。審査官は伊東惇、黒川真頼⁶⁾、井上省三⁷⁾、審査部長が河瀬水治、審査副長に九鬼隆一⁸⁾、審査総長は佐野常民⁹⁾であった。夏袴地製品の出品人は小田宇平で、その評語は「其製完全ナラスト雖モ能ク需用ニ適ス頗ル嘉ス可シ」「完全なものとはいえないがよいもので、需要に適するものである」と、厳しいコメントではあるが今後躍進する可能性を示唆している。袴地製品の出品人は小田長四郎である。その評語は「組織良好ニシテ縞條亦佳ナリ頗ル嘉ス可シ」「組織は良く、縞の條もまたすぐれて良い」というコメントである。受賞を得ることはできたが、この段階では山辺里織がまだ他の袴地を完全に圧倒した製品であるとはいえない。

第二回内国勸業博覧会での審査評語は、商業的観点からではなく、なるべく多くの出品者に賞を与える趣旨であった。そのため全体の出品物に対し良い評価を下している。仙台平・五泉平袴地も山辺里織同様この博覧会に出品。五泉平と山辺里織は類似した評語内容だが、仙台平に関しては絶賛している。既に長い歴史のある仙台平は製織技術も完成し、精好織袴地の代名詞ともなり安定した品質であった。

しかし、第三回内国勸業博覧会からは審査内容も厳しくなった。その理由は、第一回、二回の内国勸業博覧会を経ていくうち、褒賞の結果によって参加者に利害¹⁰⁾を与えるようになってきたためである。明治23年(1890)年3月22日には、実業者を代表し、渋沢栄一が経験に富む商業者を選抜し審査官に加えるように、と要請。政府も渋沢の意見を取り入れ、第三回内国勸業博覧会は民間から審査官を取り入れた。このことによって、初めて内国博覧会は商業的観点からの審査¹¹⁾が行われた。そのため、正当に製品の良し悪しを見ていくには第三回内国勸業博覧会からの審査が適した内容である。

この博覧会で山辺里織は、本練平袴地で褒賞を受賞。平織綾織物の分類であった。審査主任は平賀義美¹²⁾、審査官は阿部孝助¹³⁾、萩島信

吉¹⁴⁾、奥村佐右衛門、下城弥一郎¹⁵⁾、藤生佐吉郎¹⁶⁾の6名が評価した。褒状の模写が『博覧会出陳記』に記されているが、「賞牌ヲ佳ニシテ其用ニ適ス頗ル嘉ス可シ」との記述がある。公的文書である国立国会図書館蔵『第三回内国勸業博覧会審査報告』(p466)によると、山辺里織の評価は以下のように記されている。

村上平ハ……(中略)外観美麗仙台平ヲ髣髴タルノミナラス且価値低□ナルヲ以テ目下殆ト從來ノ仙台平ヲ壓シ随テ販路モ漸ク拡張スルニ至レリ

村上平は外観の美麗なること仙台平を髣髴とさせるに至っているのみならず、価格も安いという内容である。仙台平の袴地については「他に匹敵すべき袴地はあると見えない」と書かれているが、続きに「そのため価格も高いため一般の需要に適さない」と評価が下されている。

このことから、山辺里織への審査基準は、仙台平よりも新興の袴地であるが良品であり、今後伸びていくであろうと示唆できる。第三回内国博覧会に出品した五泉平の審査評語は以下の通りである。

五泉平ハ近來大二世ノ需要ヲ減シ村上平ニ比スレハ其販路甚狭少ナリト今回二者共ニ其出品少カラスト雖トモ只村上平ニ稍見ルヘキモノアルノミ五泉平ハ概シテ品質ノ割合ニ価値貴キニ過キ到底需要ニ適スルモノト云フヘカラサルナリ

五泉平は近年大いに需要が減り、村上平と比較すれば販路も減少している。今回二者の出品は少ないが村上平に見るべきものがあるのみである。五泉平は一般的に言って品質の割に価格が高いため、到底需要に適するものではない。といった内容である。第二回内国勸業博覧会の

審査評語と上記第三回目の評語を比較しても、細かくまた需要面・品質面の言及がなされており、商業的観点からの評語であると考えられる。

後に行われた第四回内国勸業博覧会の審査評語で山辺里織は¹⁷⁾、「品質良好縞條配色亦往々見ルヘキモノアリ平素斯業ニ専精ナルノ致ス所トス」「品質は良好で縞の配色もまた見るべきものがある、常日頃その仕事に精を出して励んだ結果である」といった内容となっている。数回の博覧会への参加によって、博覧会のあらましが山辺里織機業の中で明確になり、品質も意匠も安定していたのであろう。

3. 小田長四郎と審査委員

山辺里織物への評価が高まると、当然のことながら機業への評価も高くなった。明治34年、三代小田長四郎は新潟県染織連合会の会頭となった。同年8月の新潟県主催一府十一県連合共進会織物部の審査委員に選ばれた。年代は少し戻るが、第三回内国勸業博覧会では審査員補助を命じられ京都へ60日間滞在。審査補助の業績で銅牌を受けた。続く第四回内国勸業博覧会にも審査委員補助として銅牌を。さらに、第五回内国勸業博覧会で三代小田長四郎は審査委員となり、業績に対し銀杯一個を受けた。

第三回内国勸業博覧会より、博覧会の審査委員は、「審査官ハ事実上貴重ナル司法官」¹⁸⁾であると審査委員長の小田長四郎は述べた。審査委員に選定される人間は日本各地の著名な機業場の工場長など、第一線で指揮をとっていた人物である。審査委員は博覧会で賞を授与することで日本の繊維製品の品質を決定付ける役割も果たしていた。小田長四郎は他の織物の審査もできるよう機業の発展に尽力し、同時に山辺里織物の価値を高めたため、重大な役割に就くことができたのであろう。山辺里織は第三回内国勸業博覧会以降、2等賞や銀牌、1等賞・金牌など上位の賞を獲得。明治23(1890)年以降は飛躍的に成長した。特に明治39(1906)年11月に行われた東京府外九県連合共進会以降、出品し

たほとんどの博覧会で1等賞や金牌を受賞。東京府外九県連合共進会では、農商務大臣から小田長四郎宛に功労賞銀牌が送られた。その文は、

夙ニ意ヲ機業ニ傾ケ殊ニ袴地井ニ洋服裏地ノ改良ヲ図リ研磨多年品位大ニ進ミ販路益々加リ以テ山辺里織ノ名声ヲ博スルニ至ル其功績称揚スヘシ仍茲ニ之ヲ賞ス

機業と袴地・洋服裏地の生産や改良を図り、年を追うごとに品質も良くなり、また販路も大きく拡張したことに対して賞した内容である。この時期、農商務相は現在の経済産業省と農林水産省の役割を果たし、毎年功労賞などの賞を個人や団体に出している。審査委員として選定され、それに併せて以上のような賞を獲得することは当時日本の機業にとって大変名誉なことであった。

IV. 山辺里織にとっての博覧会

これまでに審査評語や製織技術の検討、さらには工場長である三代小田長四郎の審査官となる経緯を述べてきた。そもそも、山辺里織にとって博覧会とはどのような場であったのだろうか。

1. 山辺里織の品質を証明する場としての博覧会

山辺里織は第二回内国勸業博覧会で受賞したことを筆頭に、以後すべての博覧会において賞を得た。本文中にも述べたように、第二回内国勸業博覧会はなるべく多くの人間に賞を与える、という趣旨であった。第三回からは審査基準も細くなり、商業的観点からの賞牌授与という点で、画期的な博覧会であった。第三回内国勸業博覧会の審査評語を他の出品物に関する評語と比較すると、山辺里織が絶賛された内容であることが見てとれる。他の織物に関しては伝統・価格・需要面などを総合評価しても総てにおいて絶賛された内容ではない。

登 録 商 標

第五回内国勸業博覧会
二等賞牌

博覧会共進會品評會
賞牌受領 廿個



○明治三十四年第一等賞牌
○明治三十四年第二等賞牌
○明治三十四年第三等賞牌
○明治三十四年第四等賞牌
○明治三十四年第五等賞牌
○明治三十四年第六等賞牌
○明治三十四年第七等賞牌
○明治三十四年第八等賞牌
○明治三十四年第九等賞牌
○明治三十四年第十等賞牌
○明治三十四年第十一等賞牌
○明治三十四年第十二等賞牌
○明治三十四年第十三等賞牌
○明治三十四年第十四等賞牌
○明治三十四年第十五等賞牌
○明治三十四年第十六等賞牌
○明治三十四年第十七等賞牌
○明治三十四年第十八等賞牌
○明治三十四年第十九等賞牌
○明治三十四年第二十等賞牌
○明治三十四年第二十一等賞牌
○明治三十四年第二十二等賞牌
○明治三十四年第二十三等賞牌
○明治三十四年第二十四等賞牌
○明治三十四年第二十五等賞牌
○明治三十四年第二十六等賞牌
○明治三十四年第二十七等賞牌
○明治三十四年第二十八等賞牌
○明治三十四年第二十九等賞牌
○明治三十四年第三十等賞牌
○明治三十四年第三十一等賞牌
○明治三十四年第三十二等賞牌
○明治三十四年第三十三等賞牌
○明治三十四年第三十四等賞牌
○明治三十四年第三十五等賞牌
○明治三十四年第三十六等賞牌
○明治三十四年第三十七等賞牌
○明治三十四年第三十八等賞牌
○明治三十四年第三十九等賞牌
○明治三十四年第四十等賞牌
○明治三十四年第四十一等賞牌
○明治三十四年第四十二等賞牌
○明治三十四年第四十三等賞牌
○明治三十四年第四十四等賞牌
○明治三十四年第四十五等賞牌
○明治三十四年第四十六等賞牌
○明治三十四年第四十七等賞牌
○明治三十四年第四十八等賞牌
○明治三十四年第四十九等賞牌
○明治三十四年第五十等賞牌
○明治三十四年第五十一等賞牌
○明治三十四年第五十二等賞牌
○明治三十四年第五十三等賞牌
○明治三十四年第五十四等賞牌
○明治三十四年第五十五等賞牌
○明治三十四年第五十六等賞牌
○明治三十四年第五十七等賞牌
○明治三十四年第五十八等賞牌
○明治三十四年第五十九等賞牌
○明治三十四年第六十等賞牌
○明治三十四年第六十一等賞牌
○明治三十四年第六十二等賞牌
○明治三十四年第六十三等賞牌
○明治三十四年第六十四等賞牌
○明治三十四年第六十五等賞牌
○明治三十四年第六十六等賞牌
○明治三十四年第六十七等賞牌
○明治三十四年第六十八等賞牌
○明治三十四年第六十九等賞牌
○明治三十四年第七十等賞牌
○明治三十四年第七十一等賞牌
○明治三十四年第七十二等賞牌
○明治三十四年第七十三等賞牌
○明治三十四年第七十四等賞牌
○明治三十四年第七十五等賞牌
○明治三十四年第七十六等賞牌
○明治三十四年第七十七等賞牌
○明治三十四年第七十八等賞牌
○明治三十四年第七十九等賞牌
○明治三十四年第八十等賞牌
○明治三十四年第八十一等賞牌
○明治三十四年第八十二等賞牌
○明治三十四年第八十三等賞牌
○明治三十四年第八十四等賞牌
○明治三十四年第八十五等賞牌
○明治三十四年第八十六等賞牌
○明治三十四年第八十七等賞牌
○明治三十四年第八十八等賞牌
○明治三十四年第八十九等賞牌
○明治三十四年第九十等賞牌
○明治三十四年第九十一等賞牌
○明治三十四年第九十二等賞牌
○明治三十四年第九十三等賞牌
○明治三十四年第九十四等賞牌
○明治三十四年第九十五等賞牌
○明治三十四年第九十六等賞牌
○明治三十四年第九十七等賞牌
○明治三十四年第九十八等賞牌
○明治三十四年第九十九等賞牌
○明治三十四年第一百等賞牌

○明治三十四年第一等賞牌
○明治三十四年第二等賞牌
○明治三十四年第三等賞牌
○明治三十四年第四等賞牌
○明治三十四年第五等賞牌
○明治三十四年第六等賞牌
○明治三十四年第七等賞牌
○明治三十四年第八等賞牌
○明治三十四年第九等賞牌
○明治三十四年第十等賞牌
○明治三十四年第十一等賞牌
○明治三十四年第十二等賞牌
○明治三十四年第十三等賞牌
○明治三十四年第十四等賞牌
○明治三十四年第十五等賞牌
○明治三十四年第十六等賞牌
○明治三十四年第十七等賞牌
○明治三十四年第十八等賞牌
○明治三十四年第十九等賞牌
○明治三十四年第二十等賞牌
○明治三十四年第二十一等賞牌
○明治三十四年第二十二等賞牌
○明治三十四年第二十三等賞牌
○明治三十四年第二十四等賞牌
○明治三十四年第二十五等賞牌
○明治三十四年第二十六等賞牌
○明治三十四年第二十七等賞牌
○明治三十四年第二十八等賞牌
○明治三十四年第二十九等賞牌
○明治三十四年第三十等賞牌
○明治三十四年第三十一等賞牌
○明治三十四年第三十二等賞牌
○明治三十四年第三十三等賞牌
○明治三十四年第三十四等賞牌
○明治三十四年第三十五等賞牌
○明治三十四年第三十六等賞牌
○明治三十四年第三十七等賞牌
○明治三十四年第三十八等賞牌
○明治三十四年第三十九等賞牌
○明治三十四年第四十等賞牌
○明治三十四年第四十一等賞牌
○明治三十四年第四十二等賞牌
○明治三十四年第四十三等賞牌
○明治三十四年第四十四等賞牌
○明治三十四年第四十五等賞牌
○明治三十四年第四十六等賞牌
○明治三十四年第四十七等賞牌
○明治三十四年第四十八等賞牌
○明治三十四年第四十九等賞牌
○明治三十四年第五十等賞牌
○明治三十四年第五十一等賞牌
○明治三十四年第五十二等賞牌
○明治三十四年第五十三等賞牌
○明治三十四年第五十四等賞牌
○明治三十四年第五十五等賞牌
○明治三十四年第五十六等賞牌
○明治三十四年第五十七等賞牌
○明治三十四年第五十八等賞牌
○明治三十四年第五十九等賞牌
○明治三十四年第六十等賞牌
○明治三十四年第六十一等賞牌
○明治三十四年第六十二等賞牌
○明治三十四年第六十三等賞牌
○明治三十四年第六十四等賞牌
○明治三十四年第六十五等賞牌
○明治三十四年第六十六等賞牌
○明治三十四年第六十七等賞牌
○明治三十四年第六十八等賞牌
○明治三十四年第六十九等賞牌
○明治三十四年第七十等賞牌
○明治三十四年第七十一等賞牌
○明治三十四年第七十二等賞牌
○明治三十四年第七十三等賞牌
○明治三十四年第七十四等賞牌
○明治三十四年第七十五等賞牌
○明治三十四年第七十六等賞牌
○明治三十四年第七十七等賞牌
○明治三十四年第七十八等賞牌
○明治三十四年第七十九等賞牌
○明治三十四年第八十等賞牌
○明治三十四年第八十一等賞牌
○明治三十四年第八十二等賞牌
○明治三十四年第八十三等賞牌
○明治三十四年第八十四等賞牌
○明治三十四年第八十五等賞牌
○明治三十四年第八十六等賞牌
○明治三十四年第八十七等賞牌
○明治三十四年第八十八等賞牌
○明治三十四年第八十九等賞牌
○明治三十四年第九十等賞牌
○明治三十四年第九十一等賞牌
○明治三十四年第九十二等賞牌
○明治三十四年第九十三等賞牌
○明治三十四年第九十四等賞牌
○明治三十四年第九十五等賞牌
○明治三十四年第九十六等賞牌
○明治三十四年第九十七等賞牌
○明治三十四年第九十八等賞牌
○明治三十四年第九十九等賞牌
○明治三十四年第一百等賞牌

山 邊 里 平 御 袴 地

○本練平
は最上織糸を以て製し
たるものなれば高貴優美
にして最も久しきに耐ふ
る

○半練平
は地合混軟なるが故に通
常袴地の如く折き様の憂
なくしかも寒暑常用に適
す

○極暑平
は地合混軟にして暑中酷
熱の際といへとも更に苦
熱を感せず

○精好平
は價格低廉にして常用に
適す

小 田 工 場

図9 『家庭の志るべ』(明治38年4月号 白木屋)に掲載された広告

第三回内国勸業博覧会で賞を獲得できたことで、山辺里織は商業に適した審査委員に認められ、新興織物業としての品質を証明できたのである。

博覧会での高評価もあってか、白木屋発行の『家庭の志るべ』などの広告の扱いも大きくなった(図9)。


2. 山辺里織機業の技術向上の契機としての博覧会

第三回内国勸業博覧会と同時期、山辺里織は従来の販路を拡大し、関西方面との取引を開始した。以後、関西からの注文が激増。工場の規模も大きくなった¹⁹⁾。例えば、明治17年の時点では従業員数は総勢96名、男性16名、女性80名だが明治35年では従業員総数298名、男性31名、

登 録 商 標

第五回内国勸業博覧会
二等賞牌

博覧会共進會品評會
賞牌受領 廿個



謹啓

益々御清榮奉賀上候陳ハ今回東
京勸業博覧會ニ於て本練平出品
致シ候處一等賞牌授與セリ
レ候是畢御得意各位ノ御引立
ノ結果ト深ク奉感謝候向後ハ
一層奮勵シ益々精良品ヲ織製シ
以テ御厚意ニ酬ヘ度キ誠意ニ御
座候間何卒倍舊ノ御愛顧ヲ賜ハ
ランコト伏テ奉願上候先ハ右御
禮申上度如斯御座候頓首再拜

明治四拾年七月

小田長四郎

製 田 長 四 郎 小

村 上 郷 土 資 料 館 蔵

○御隆昌奉賀上候陳者本年奉東京府
會ニ出品シ一等賞牌授受ノ件ハ蓋シ
上置候處今般亦々左ノ通リ拜受仕候
榮織聯合共進會出品一等賞牌
示城勸業博覧會出品一等金牌
後三回ノ出品ニ對シ何レモ優等ノ賞
致候ハ皆御得意各位ノ厚キ御引立
奉成結附後益々精良品ノ製作ニ相
ノ御厚意ニ因ハシテ期シ申候何卒
愛顧ヲ奉懇願候

上度如斯ニ御座候 恐々頓首

年十一月廿三日 小田長四郎

製 田 長 四 郎 小

村 上 郷 土 資 料 館 蔵

図10 明治40年 三代小田長四郎日誌 (村上郷土資料館蔵)

女性267名。産出高は明治17年で1651反、代金は8167円50銭。明治28年の資料では6971反、50875円1銭(前年27年度のものの)。明治35年(前年度のものの)の産出高は、8546反、92174円86銭。この数字からも伺えるよう、山辺里織は明治の中ごろからはめざましい勢いで発展を遂げた。

博覧会は国内イベントとして大きな役割を果たし、最盛期となった第五回内国勸業博覧会は、日本中が最も博覧会に沸いた時代であった。この時代、各機業場も懸命に品質を上げ、工場を

拡大しようと励んでいた。博覧会が商売に与える影響は大きかった。全体が活気に沸く中で、山辺里織は評価を落とさず良品を作りだし、数多くの賞を受賞できたことは特筆すべきことであろう。製織技術を高く上げ、規模・販路を拡大した山辺里織は認知度を更に上げるよう雑誌広告等を用いて機業を宣伝(図9)。また、明治40(1907)年、三代小田長四郎の日誌によると、受賞結果の葉巻を顧客に郵送するなど(図10)、博覧会による結果が売上を左右させているのも周知の事実として、更に品質や生産高を上げ、機業として、村上における一つの産業として発展させようとしたのではないだろうか。

V. 結 論

第二回内国勧業博覧会から明治期における博覧会と一部共進会について論じてきた。山辺里織にとって博覧会とは、品質を証明させるうえで利用できるものであり、また広告の効果を持つものであった。図9の広告には、博覧会での褒賞結果を示す記述が見られ、さらに、「山辺里絹織物業沿革」、「山辺里織元小田長四郎機工場沿革」では、明治・大正期の記述は博覧会が主な内容として記されている。山辺里織機業は博覧会を大きなイベントとして捉えていたことが伺える結果である。

山辺里織は江戸時代に、自力で販路を拡張するため多くの土地を回った。しかし、当時は家内産業であったため生産能力が低く、加えて、卸売業者も山辺里織の品質を認めていたとはいえない。明治5年には東京へ販路を拡大し、ようやく山辺里織にも新たな顧客がつき徐々に生産量や売り上げも上向きになってきた。そのような時期に博覧会が催され、積極的に製品を出品。博覧会が当時の日本国民へ与えた影響は大きく、受ける評価を山辺里織も申し分なく利用し、新たな顧客獲得に繋がる結果を得ることができた。

明治時代は経済の動きも不安定であり、好況や不況を繰り返していた。不安定な経済状況の

中では、品質を証明することで売上げが約束される。品質を認定させるためには、多くの場で競い合うような博覧会や共進会などが最も近道であった。それまでは「伝統」を出すことによって製品を売っていた生産者も、従来のようにはいかなくなり、価値を製品そのものに見出すようになった。人々の商業への関心は博覧会によって具現化され、また商業者もそれを見抜き、博覧会が持つ重要性を明瞭にした。そのような状況の中で、山辺里織は明確に博覧会が持つ機能について認識していたのであろう。

吉田(1970)の研究では、博覧会は富国強兵を促すものである、と述べ、國(2005)の研究では博覧会は国とともに発展するものである、と述べた。いずれも新たな時代となった明治時代の風潮にふさわしいものである。この二者の考えを山辺里織の観点で見ると、山辺里織は明治時代の国の発展のために一織物として充分その機能を担えるほどの製品だったのではないだろうか。

総括と今後の課題

多くの博覧会研究がなされている昨今、このように一つの織物、とりわけ一地域で発生したものを扱う研究はそう多くないであろう。

ひとつの織物に焦点を当て博覧会を見た時に、伝えられている時代背景や基準は本当に信じて良いものであるのか、考察すべき点は山のようにある。

これまでの博覧会研究では史学や美術史などの視点で論じられてきたものが多く、全体のあらましを述べることに重点が置かれていた。近年、出品物の動向を検討するものや、賞を獲得した製品についての考察が一つの研究として主流となってきたが、作り手側の意図を踏まえた研究は極めて少ない。そのため、今後、一研究の一視点として、作り手側から見た博覧会の研究が必要となることをここで提言したい。

また、冒頭でも述べたように、山辺里織と博覧会に関する研究はこれまでに皆無である。山

辺里織の博覧会研究がこれで全てであるとは言うことはできないが、今後の資料調査によってさらに密度の高い研究ができる。そのため、今後も資料調査とともにこの織物の歴史を明らかにし、再考を行うことを今後の課題とし、むすびにかえることとする。

註

- 1) 前稿（共立女子短期大学生活科学科紀要第54号）では、山辺里織は宮城県で延宝年間（1673－1681）より織られている袴地、仙台平と、新潟県五泉市で寛保2（1742）年より織られていた袴地・五泉平と関連があることを論じた。さらに、山辺里織は明治34年から昭和2年までの間に、五泉平に影響を与えたことを発見。前稿ではこの三者を比較・検討。山辺里織の全貌とその独自性を明らかにした。
- 2) 山辺里織の名称は、「村上稿・村上平（江戸時代～明治初期）」、「山辺里織（明治9年～）」等、時代によって変遷したが（前稿参照）、本稿では時代に関係なく袴地を示すものとして「山辺里織」の表記を用いる。ただし、洋服裏地については「サベリ」と表記する。
- 3) このような全国的な調査は府県物産志が初めてではなく、既に江戸時代にもされていた。編纂の意図は府県物産志とは異なるが、上方（京阪地方）視点で集計されてものなど、それぞれの資料によって特徴が異なる。江戸時代は国内産物の編纂が盛んであった背景もあり、明治時代に入ると前近代の調査を基礎としながらも総ての全国的資料を欠いていた事実を受け止め、明治政府は改めて全国統計をとることとした。もっともこの統計は今後の日本の経済政策を図る上で事実上必要なものであった。人口・土地・物産などの統計は、全てこの時期に始まることになる。明治維新以後、蚕種・生糸の輸出が欧州の不足に対して増加したため、国内統計を諸外国からの問い合わせに応じるが必要とされた。明治5年を期限とし、各府県に提出を要求したのであった。
- 4) 國（2005）によると、第二回内国勸業博覧会は、明治14年3月1日から6月30日まで、東京上野公園で開催された。出品数、入場者数、ほとんどの分野で明治10（1877）年の第一回内国博の規模を凌ぐ結果となった。第二回内国勸業博覧会を見に行くために多くの人々が東京へ向かい、社会現象となった。それほどまでに内国博が人々に与える期待は大きかったのである。

山辺里織は第二回内国勸業博覧会に出品され、褒状を得た。第二回内国博覧会の順位付けは名誉・進歩・妙技・有功・協賛・褒状の順に賞を設置した。最高位を名誉賞と位置付け、各賞に明確な基準が設けられた。受賞者は4千人ほどで、全体の1割余りが受賞した結果であった。
- 5) 平成22年調査時に発言。
- 6) 明治2年（1969年）に大学少助教に任じられて以降、文部省・元老院・内務省・農商務省などに籍を置き、「語彙」・『纂輯御系図』（横山由清と共編）・『大日本農史』などの編纂に参与する。正倉院御物整理、皇室博物館学芸員など歴任。
- 7) 明治時代の技術者。官営洋式毛織物工場長。
- 8) 文部省に出仕し、文部少輔（現在の文部省事務次官）。
- 9) 佐賀藩の事務官長としてバリ万博に派遣。後の博覧会行政の中心を担っていた。博覧会参加の目的を国威発揚、西洋の調査、技術伝習、貿易拡大、日本の広告と掲げた。
- 10) 褒賞はその商品への付加価値を示すものであり、商品の売り上げを大きく左右するものとなった。そのため、出品者たちにとって意にそぐわない結果となることで訴訟する事例も出てきた。もっとも、第二回内国勸業博覧会までの審査官は官庁にいる、役人が審査をしていた。そのため、製品の良し悪しなどは商業的観点ではなく、曖昧な基準であった。役人が審査することによって大久保利通の推奨してきた、「なるべく多くの人間に賞を与える」という姿勢がすぐに行きとどく環境であったのだが、出品者にとっては重大な問題であった。

- 11) 國 (2005, p118) によると, 第三回内国勸業博覧会での審査評語は第二回のそれより各段に進歩し, 細かくなった, と述べ, 初めて製品を採点し, 点数化したという。
(村上郷土資料館蔵)
『京城博覧会出品申込書』(村上郷土資料館蔵)
『明治四拾年韓国京城博覧会第三部解説書』
(村上郷土資料館蔵)
 - 12) 科学染料による染色法を修学。東京職工学校 (東京工業大学) 東京大学教授, 農商務省技師となる。後に大阪商品陳列所所長, 大阪織物会社を設立。
『博覧会出陳記』(村上郷土資料館蔵)
『明治四拾年度三代小田長四郎日誌』
(村上郷土資料館蔵)
 - 13) 商家出身。東京毛糸紡績会社。
『府県物産志』(国立公文書館蔵)
 - 14) 第三代八王子織物組合長。八王子織物の推進者。
『第二回 (明治十四年) 内国勸業博覧会審査評語』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
 - 15) 明治期の群馬県伊勢崎の有力織元, 買継商, 織物同業組合長。
『第三回内国勸業博覧会群馬県出品人名録』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
 - 16) 桐生市藤生佐吉郎工場の工場長。
『第三回内国勸業博覧会審査報告』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
 - 17) 国立国会図書館蔵『第四回内国勸業博覧会受賞人名録』。
『第三回内国勸業博覧会審査報告摘要』(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
 - 18) 國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』p118より。
『第四回内国勸業博覧会出品部類目録』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
 - 19) 『第五回内国勸業博覧会解説書』(村上郷土資料館蔵) と『第四回内国勸業博覧会出品願』(村上郷土資料館蔵) 『明治17年鹿児島勸業博覧会』(村上郷土資料館蔵) には, 職工数から産出高まで詳細な記述がある。先資料を基に述べると, 製造の種類は明治17年より28年の方が多く, 初期の頃に織り出されていた織物を継続して織っていたことが見受けられる。明治35年になると, 機業の収入の大部分が袴地や洋服裏地等にシフトした。生産品種は少ないが, 産出高や販路などを見ても拡大している様が見える結果である。
『第四回内国勸業博覧会授賞人名録』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第四回内国勸業博覧会審査概況』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第四回内国勸業博覧会授賞人名録』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第五回内国勸業博覧会出品解説書』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第五回内国勸業博覧会出品審査概況』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第五回内国勸業博覧会審査報告』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
『第五回内国勸業博覧会事務報告』
(国立国会図書館近代デジタルライブラリ)
- 参 考 資 料**
- 『山辺里絹織物業沿革』(小田家蔵)
『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』
(村上郷土資料館蔵)
『明治拾七年鹿児島勸業博覧会出品解説書』
(村上郷土資料館蔵)
『第四回内国勸業博覧会出品願』
(村上郷土資料館蔵)
『第五回内国勸業博覧会出品解説書』
- 参 考 文 献**
- 吉田光邦『万国博覧会 技術文明的に』(昭和45 (1970) 年1月20日第1刷, 日本放送出版協会)
角山幸洋『日本染織発達史』(昭和51 (1976) 年3月10日第4刷, 田畑書店)
吉田光邦編『万国博覧会の研究』(昭和61

山辺里織と明治期勸業博覧会

(1986) 年 2 月 25 日, 思文閣出版)

角山幸洋『府県物産志 影印と研究』(平成 9

(1997) 年 3 月, 関西大学経済・政治研究所)

國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』

(平成17 (2005) 年 5 月, 岩田書院)

伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』(平成20

(2008) 年 6 月 1 日, 吉川弘文館)

調 査 日

村上郷土資料館

平成20年 2 月・5 月・8 月

平成21年 5 月

平成22年 8 月

平成23年 9 月

小田家

平成21年 6 月

平成22年 4 月

平成23年 9 月

謝 辞

大場喜代司

大庭康裕

小田テル子

北野裕子

徳田誠志

野田明

平林直己

村上郷土資料館

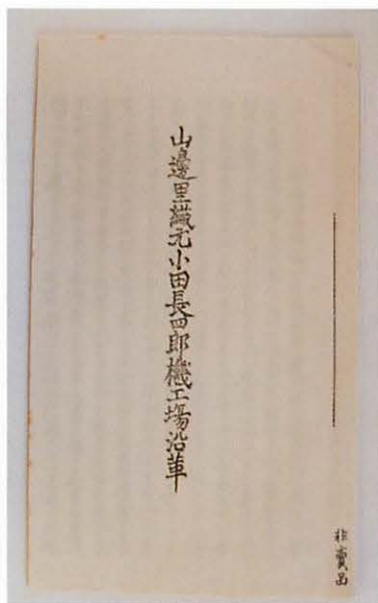


図2 『山辺里織元 小田長四郎機工場沿革』
新潟県立文書館蔵

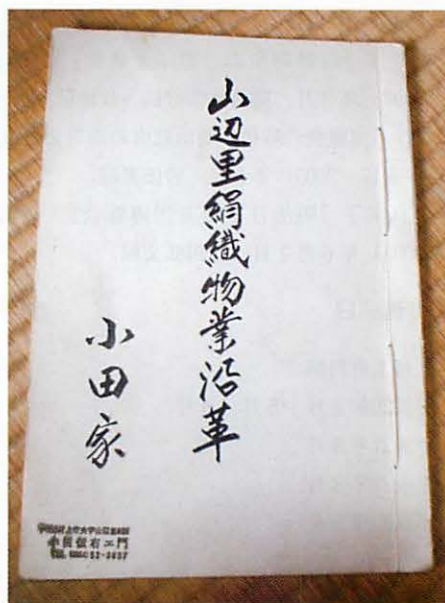


図3 『山辺里絹織物業沿革』 小田家蔵



図4 『博覧会出陣記』
村上郷土資料館蔵



図5 第二回内国勸業博覧会出品 冬袴地本練平 『博覧会出陳記』 村上郷土資料館蔵

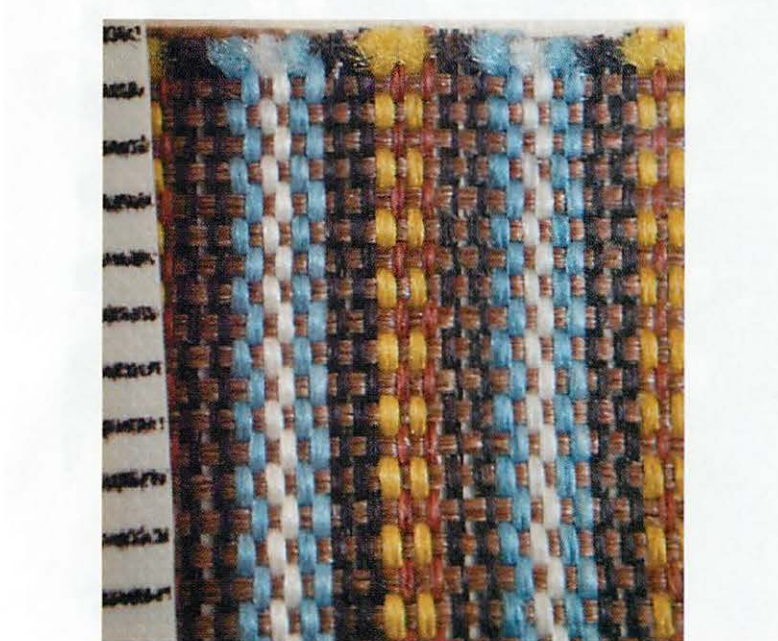


図6 第二回内国勸業博覧会出品 夏袴地精好平 『博覧会出陳記』 村上郷土資料館蔵

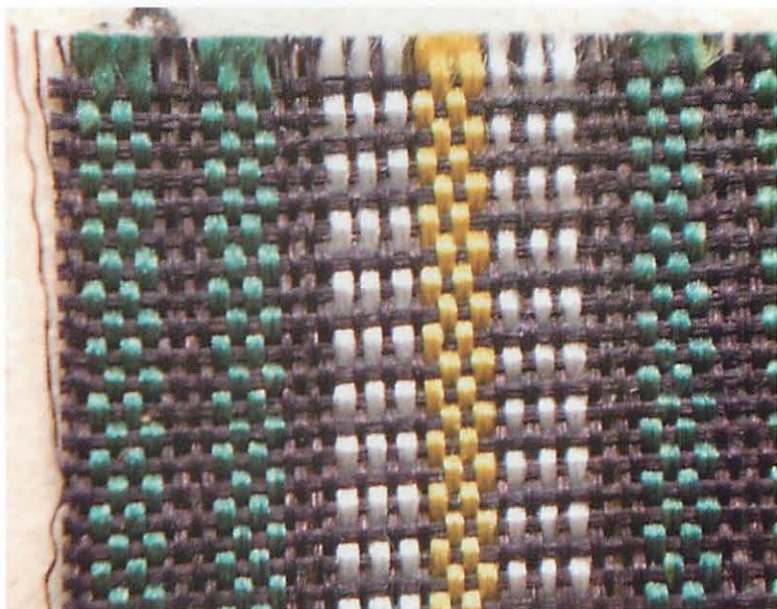


図7 参考資料 明治24年本練平袴地 『諸国御注文記』 村上郷土資料館蔵



図8 第五回内国勸業博覧会出品 本練平 『博覧会出陳記』 村上郷土資料館蔵